

京都の近代化と同志社

同志社社史資料センター
社史資料調査員

小 枝 弘 和

かつてこの今出川キャンパスの地で繰り広げられた歴史については既に鋤柄先生と浜中先生よりご報告がありました。この今出川キャンパスが如何に歴史上特別な場所であったのか、ご理解いただけたのではないかと思います。

私の報告では、そうした地に開校した同志社を、その創設期に的を絞り、課題を設定したいと思えます。

現在の同志社大学の原点は一八七五（明治八）年十一月二十九日に開校した同志社英学校になります。明治初期に開校しました。同志社では英学校の開校より、キリスト教主義を貫き、今も建学の理念の一つです。同志社はキリスト教主義学校として、あるいはキリスト教の牧師育成に大きく貢献した学校として、また、明治初期に開校した私立学校として、明治初期の教育史でこれまでに研究が行われ、『同志社百年史』を代表として多くの著書や研究があります。事実、そうした教育史上、同志社の存在意義は明確にされていますが、それでもなお私にはいろいろと疑問がありました。

例えば、創立者である新島襄は、開校以来、永眠する一八九〇年までに同志社の不動産をキャンパスの周りに約三万坪所有していました。開校当時は借家のみです。財政的支援があったとはいえ、なぜ土地をこれほど

までに手に入れる必要があったのか、ということです。ひとつの答えは学校の拡大でした。よく知られていすように、東京へ天皇が移った一八六九年以降、キャンパス周辺は空き地となり、土地政策的に手に入れやすい状況でした。実際に土地を取得し、そこに立てたものは学生寮と新しい学校です。要するに、学校の拡大を新島は考えたということだと私は解釈しています。それにしても、なぜ開校して十数年で、同志社病院、京都看病婦学校、同志社予備校、同志社普通学校、ハリス理化学校と立て続けに学校を設立したのか。確かに学生数は増えていましたし、ハリス理化学校開校時には金銭的な幸運が重なったのですが、生徒数から考えましても迫られた拡大の必要性はありませんでした。そんなに急いで拡大する必要がなぜあったのか、私は疑問に思っていました。

そもそもそうした疑問が生じたのは、開校から七年後に始まったとされる同志社大学設立運動です。新島が命を賭して取り組んだ運動で、永眠までにその夢は叶いませんでしたが八年近く全力を傾注しました。しかし、どうして開校から七年しか経っていないのに大学を作ろうとしたのか。確かに五千円の寄付を最初に得たことはその弾みになったと考えられます。また、新島の宿志であったとも言えます。しかし、キリスト教を教えると広告に明記しなかったことや、東京大学に対抗する意識を強烈に示したことに新島の本来の目的が見え隠れするような気がします。

数々の疑問があるなかで今回「京都の中の同志社」というテーマに取り組むことになりました。明治初期の同志社を取り巻く環境を知ることによって自分自身の疑問に対して回答になる手がかりを得たような気がいたします。本日は同志社の創設期にあたる明治初期の京都の近代化の状況を学校教育の充実と殖産興業の発展という点から見ることで、近代化という大きなうねりの中で同志社の歴史をどのように考えるべきかを考えて行きたいと

思います。まずは同志社英学校が開校する前の京都の状況を考えてみたいと思います。そのために歴史を少しだけ廻ります。

同志社英学校が開校する七年前の一八六八（明治元）年に大きな戦いが起きました。ご存じのとおり、戊辰戦争です。京都の鳥羽・伏見の戦いに始まり函館の五稜郭に至るまでの一連の戦争ですが、時代の変革を象徴する戦争であったことは誰もが認識されることだと思えます。

この一年後の一八六九（明治二）年、京都にとって大きな変化がありました。天皇の東京奠都です。天皇および御所周辺に住んでいたほとんどの公家たちが一齐に東京へ移り、京都は御所を中心にかつての宮廷文化の賑わいはすっかりと様変わりをしました。かつて九条家に仕えていた下橋敬長は明治六、七年頃の御所、すなわち同志社英学校が開校する直前の御所をみて、このようにのちに述べています。

「御所は…草原になっておることは申すまでもなく、屋根の瓦も落ちておりますし、壁は落ちております。

御所の中の汚いことは見られた体裁ではなく…」（下橋敬長述「幕末の宮廷」平凡社一九七九年四三三頁）

時代の変わり目を見てきた人物が御所の衰勢を見た感想と受け取ることができます。明治の初期の状況に關してこのようなイメージを持たれている方もおられると思います。ところが、実際には京都は東京奠都後にすたれる一方であったわけではありません。のち京都府知事として辣腕をふるう横村正直らが主導となって近代化がすすめられていました。近代化の政策すべてを語ることは難しいので学校教育に関する展開を見ていきたいと思えます。

まず、戊辰戦争が始まった年には既に京都市の上京と下京の六十五の組に分けられた区域に六十四の番組小學校が整備されます。同年には現在の東山中学校・高等学校の起源である勸学院が知恩院にて開設されています。

す。既に仏教系の学校が設立されていました。東京奠都の翌年の一八七〇（明治三）年には旧京都所司代跡に京都府中学校が開設されます。のちの一八七三（明治六）年に現在の京都府庁の位置に移っております。また中学校が設立された年には欧学舎が設けられ、独逸学校、仏学校、英学校が設立されています。二年後には医学教育も行った療病院、女性のための教育施設である女紅場、その一年後には京都で最初の公立図書館集書院が設立されました。同志社英学校の一年前には京都慶応義塾も開校しています。生徒数や東京との距離的な関係から同年中に閉校しますが、同志社が開校するまでに、官立・私立を問わず多くの学校が設けられていたことがわかります。その学校の性格上、当然貧富の差や信仰の問題などで限られた人物に開かれた学校であったかもしれませんが、近代化の基礎を作る教育に関してみても京都府並びに民間の力の入れようは、御所が廃れていたとされていた時から既に見られます。

次にひとつの殖産興業政策の事例を紹介し、同志社のおかれていた状況を考えてみたいと思います。近代化と聞いて頭に浮かぶ用語のひとつは殖産興業でしょう。京都における殖産興業の中心は一八七一（明治四）年、河原町二条下ルにあった旧長州藩邸跡に設けられた勧業場といわれる施設がとりまための機関として設立されます。同年に明治期の主要産業になる生糸にかかわる養蚕場、理化学実験や理化学教育を行う京都舎密局、革製品にかかわる製靴場、一八七二（明治五）年には製糸場、一八七四（明治七）年には靴を作る製靴場、一八七五年ゴミから肥料を製造する化芥場などが設立されました。勧業場開設から同志社が設立されるまでに、いわゆる近代化を象徴する一つの産業の基礎的な建物が次々と設立されました。御所の衰退とはまた別の発展を垣間見ることができると思います。

次は御所の話になりますが、御所が近代化の象徴の一つになったことがうかがわれます。簡単に江戸時代の

御所の話をしますと、御所には九門といわれる九つの門があります。その門を通り抜け、御所と公家屋敷を見ることが、一つの観光となっていました。特に、天皇がいらつしやる禁裏御所に参内するお公家衆の行列をみることは観光する人々の目玉でした。江戸時代のいわゆる観光案内に同様のことが書かれています。

明治時代でも御所はその衆目を集めていた場からでしょうか、興味深いことが行われます。一八七二年から京都博覧会が実施されます。以来、年一回春に三ヶ月程度で一八九二（昭和三）年まで続きます。第一回は建仁寺や知恩院などの寺院を会場に、数か所に分けて博覧会が実施されましたが、第二回からの会場は御所で、仙洞御所と大宮御所が使用されたと記録にあり、禁裏御所も使用された記録があります。一九一四（大正三）年以降は専用の会場が京都の岡崎の地にできますので、そちらへ移動しますが、それまで御所で行われていました。一八九七（明治三十）年には御所の南東に常設の会場が設置されますので、御所が博覧会場、要するに明治初期の殖産興業の情報発信基地であったことがわかります。来場数は四万とも二十万とも四十万とも書かれたものがありますが、いずれにせよ大変な注目を集めた博覧会であることは間違いないと思われれます。

なかでも象徴的なイベントがあります。気球の打ち上げです。一八七七（明治十）年十二月六日、同志社開校の二年後になります。京都府と鳥津製作所の創業者である鳥津源蔵が協力して水素を用いた気球の有人飛行に成功します。当時は気球を打ち上げる際のバルーンの軽量化が問題で、その軽量化に成功したのが鳥津です。この打ち上げに用いられた場所が仙洞御所で一枚三円のチケットが四万八千枚完売しました。相当の注目を集めたイベントであったことがわかります。ちなみに、鳥津製作所ですが、創業は同志社と同じ一八七五年です。その創業から学校に対して実験器具を提供しています。現在二条木屋町下ルにある創業の地で鳥津製作所創業記念資料館があります。鳥津の熱意を感じ取れる資料館ですので、足を運ばれると一層興味をそそられるか

と思います。

今ご紹介した二つの事業は、同志社英学校開校後に、まさに真南で行われていた事業です。こうした環境が新島に何らかの感情を起こさせたのではないかと考えるのはある意味自然なことではないかと思えます。

今同志社英学校の開校前と開校直後に関して京都の近代化の一部をご紹介しました。こうした同志社を取り巻いた状況を考えますと、新島もこうした周囲の動きは知っていたものと思われれますので、知的な、あるいは示唆的な刺激を受けたのではないかと思われれます。

同志社はそもそも開校の時には京都府の理解を得ることをできましたが、例えば体育の一環で鴨川で運動をしていると、京都府は耶蘇が暴動を起こすのではないかと警戒するわけです。キャンパスの北には相国寺があります。仏教界と演説などで互いに批判しあったことなどが歴史的事実として残っています。決して好意的とは言えない状況で学校を運営していくには特色ある学校作りは欠かせなかつたと思います。

そのための学校拡大と新島襄は思っていたのではないかと私は考えています。しかし、残された資料にこれに関する明確な記述はありません。

ところが、資料的に新島が官立学校を批判しているものがあります。例えば、小学校を批判しました。大学を作る時は官立の東京大学を批判しました。新島が新しい学校を創設し、それを相対化して正統性を主張する時には常に頭には官がありました。この相対化の結果もたらされたのはキリスト教、もしくはキリスト教主義の正当化を暗喩するものでした。新島の信条そのものです。しかし、キリスト教やキリスト教主義を文字として明文化することは極力避けていました。明治初期の政策的な実質的キリスト教解禁とは全く違う世の風潮を感じていたのでしようし、鹿鳴館時代のキリスト教に追い風の時代であっても実質的な世の風潮で感じることは

異なっていたでしょう。さらには同志社の南の御所では常に最新の発表が展開されている。新島は同志社のあり方を常に考えなければならぬ立場であり、その努力の結果が明治初期の同志社の拡大であったのではないかと考えられます。

こうした周囲の歴史的な事実も踏まえながら百五十年史編纂に向けて同志社史を今後とも検討して行きたいと思えます。ご静聴ありがとうございました。